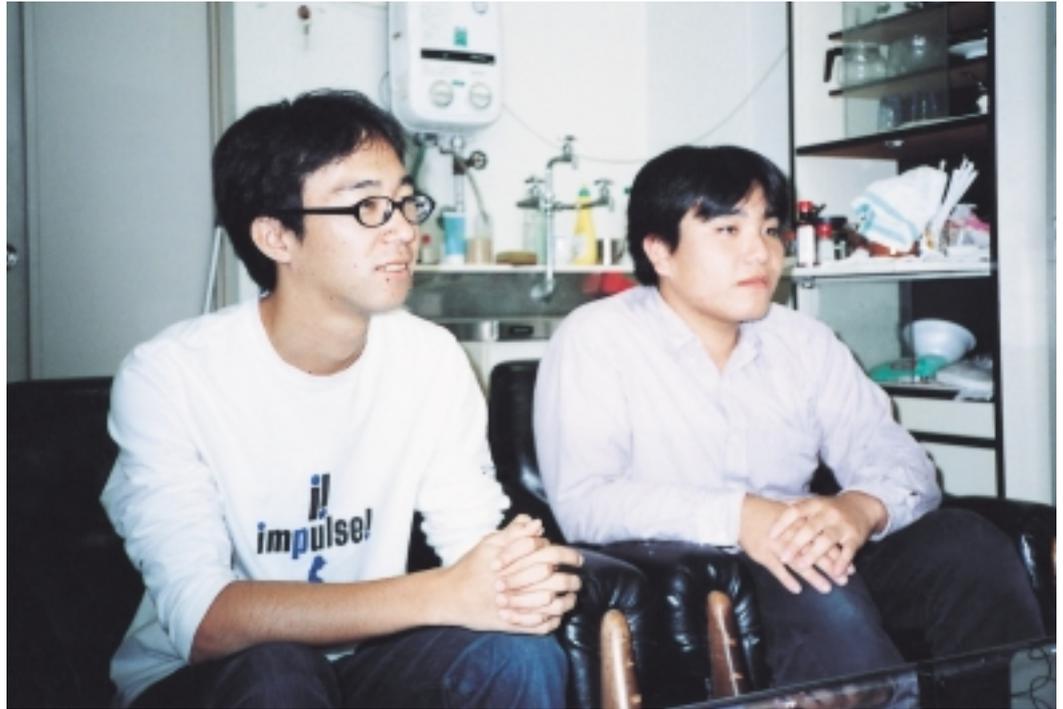


牙をむく雪の自然現象と雪を活用した豊かな雪国文化という両面から研究を推進していきたいと思っています。



データを調べてみますと、全国で約7,200件の雪崩が発生し、5,400人程が亡くなっています。そのうち、新潟県で約1,700件が発生し、1,100人程が亡くなっています。件数は全国の約4分の1、亡くなった人は5分の1を占めています。

新潟県での発生件数が大変多く、亡くなった人も多いことから、新潟において雪崩の研究に取り組むことにしました。

雪崩災害が発生すると、すぐ調査グループを組んで、災害現場に駆けつけ、調査を行います。雪崩発生に到るまでのメカニズムを調べて報告書を作成します。さらに、必要に応じてその対策を提言することも私たちの任務としています。

れを繰り返しています。

江戸時代の後期に越後・塩沢の鈴木牧之が著した「北越雪譜」には、表層雪崩と全層雪崩が起こる時期、予兆や危険度の違いが書いてあります。もうすでに、その時代に雪崩の実態がある程度が分かっていたのです。昔の日本人は自然を良く観察していたことが分かります。ところが、現代はコンピュータのシミュレーションに走る傾向があります。確かにデータはきれいに表れます。しかし、自然の情報はあくまでも現場にあるという持論を持っています。いわゆる現場主義を貫いて研究しています。



北越雪譜(野島出版)

昔の日本人は自然を良く観察していた

江戸時代に入り、国が安定してくると、城づくりや町づくりのために、山の木を切ることが多くなりました。それが、雪崩が起こる大きな原因になりました。

さらに時代は下って近代に入り、経済活動発展のために、雪崩発生の原因関係を忘れて再び木を切りました。雪崩の歴史はそ

雪形が面白いと言っておられますが、

文化面でも密接な関係を持つ

雪と日本人の歴史

降雪、積雪、吹雪、雪崩、融雪などの雪氷現象の集大成によって融雪期に表われる

雪形「オオハクチョウ」(谷川岳)



雪形「西洋貴婦人」(長岡市営スキー場)



山の残雪模様を雪形と言います。この雪形も全国で新潟に一番多く表われます。

雪形には多様性に富んだ自然科学的な意味があります。雪崩の発生が多い場所や雪の吹き溜まりの場所を知る手掛かりにもなります。また、春から夏にかけて残っている水資源としての残雪量とその消耗の目安にもなっています。昔の人は、雪形を種まきや田植えなど農事暦（農作業の暦）として使っていました。

雪形は生活に必要な情報を提供してくれる一方で、雪形の形そのものの面白さも見逃せません。

実際の雪形につけられた名前を紹介します。【跳ね馬】【じさ雪ばさ雪】【西洋貴婦人】【白馬の騎士】【オオハクチョウ】【舞姫】等々。

雪との関わりから生まれた文化として、雪形はまさに自然がつくり出した芸術と言えましょう。雪を楽しむ。雪形を遊ぶ。この精神を大切にしていきたいものです。

今後の研究の展望は、どのようにお考えでしょうか。

雪害は忘れた所にやってくる

近年、地球温暖化の影響で豪雪地域でも、暖冬小雪傾向になっています。たしかに全国的に大雪となることはなくなってきましたが、ある期間、ある特定の地域だけ大雪になることが起こるようになってきています。



実際の煙型雪崩（カナダ）



模型を使った煙型雪崩のシミュレーション

雪の被害は、しばらく大雪がなく防災を忘れた所にやってくるようになったということです。これはとても対策を立てにくい状況です。

しかし、雪害はいつかまたやってくるものと認識し、普段から心構えをしておく必要があります。それを怠ると大した雪でなくても、大きな被害を受けることになります。

雪の研究を災害と雪国文化の両面から推進

災害に関して単に数値情報を伝えるのではなく、視覚的な体験を通して、皆さんに関心を持ってもらいたいと思います。それには、災害を前面に打ち出すよりも、雪がつくり出す造形美から入っていく方法が効果的と考えられます。雪形が表わす見事な画像、模擬物質による雪崩シミュレーションなどを通じて、災害情報を伝えることができればいいと思っています。

雪という自然現象は、時として人に牙をむいて災害をもたらしてきました。しかし、災害という面の裏には雪との長いつき合いがあります。雪と共存をはかり、雪に親しむことで、雪は利益を与えてくれました。そこから生み出される文化があります。その文化を熟成してきた自然現象を研究することで、災害に関する情報も得られます。

牙をむく雪の自然現象と雪を活用した豊かな雪国文化という両面から研究を推進していきたいと思っています。

インタビューを終えて

全県豪雪地帯の新潟県にとって雪害は大きな課題である。その対策や研究を誰がしているか興味があった。雪氷学を専門とする和泉先生のインタビューに同席して、新たな視点で雪や景色について考える機会となった。話を聞く前は、研究所の名称から積雪地域の雪崩や大雪に対し現地調査や地形などの計測をしてコンピュータによりシミュレーションをしているかに想像していた。しかし、和泉先生の研究は更に幅広く、山の雪解けや雪崩が描く自然の美しさ、残雪を見ながら農作業を進めてきた新潟の文化にまで及んでいる。

雪崩や積雪による犠牲者の多い新潟県であるが、一方で雪と豊かな自然によって創り出される美しさも日本一であるかのように説明された。積雪や雪崩といった研究は、寒冷と危険を伴うものと想像できる。その一方で和泉先生の豊かな感性が自然の美しさと新潟の雪国文化とを調和させながら授業展開している楽しさが想像できた。

教員が楽しく話すと聞く方も引き込まれる。和泉先生の授業の聴講を勧めたい。

(医学部保健学科 藤野邦夫)